

空とぶスクラップ船

まったく困ったことになったものだった。ぼんやりしていたら、突然やってきた馬車におなかをひかれてしまったのだ。もちろん僕は悲鳴を上げたが、御者は気づきもしなかった。ひかれた部分は紙のようにぺちゅんこになり、地面に張り付いてしまった。引きはがすには、四本の足を突っ張って、思いっきり力を込めなくてはならなかった。

気がつかなかったのだが、ニーナはその様子を少し離れたところから眺めていたようだった。突然すたすと現れて、手伝ってくれたのだ。しつぽをつまみ、引っぱりあげてくれた。僕は地面から離れることができた。やれやれと思ったが、ニーナは僕を手をふら下げたまま歩き始めるではないか。どこへ連れていかれるのだろうかと思っただが、なんとなく逆らう気にならなくて、僕は手提げカバンのようにゆらゆら揺られるままになった。

王宮の門を入り、庭を横切って、建物の中へ入っていくようだった。途中でキッチンに立ち寄り、コックからドライアイスを少し分けてもらっていた。ニーナはそのまま、僕を自分の部屋へ連れて戻った。僕を机の上に置いた。

胴体がべちゃんこになっているのだから、動くことだつてままならなかった。ああ向けに置かれたのだが、そのままおとなしくニーナを見上げていることしかできなかつた。

ニーナは、僕の口を大きく開けさせた。ドライアイスを細かく砕き、長い鉛筆を使って、のどの奥へ一つずつ押し込み始めた。ひどく冷たかつたが、何とか我慢した。ドライアイスのカケラをいくつも、ニーナは僕の胃の中に詰め込んだ。ニーナは立ち上がり、洗面所へ水をくみに行つた。グラスに入れて、すぐに戻つてきた。その水を、僕の口の中へ景気よくあけた。大量の水がのどを通つていくので、咳き込みそうになつたが、これも我慢した。胃の中で、水とドライアイスが反応し始めた。口から白い湯気が出始めた。その口をニーナが押さえた。

ポンと大きな音がして、僕の腹がもとに戻つた。そのうちに湯気もおさまつた。とたんにいい気分になつて、僕は起き上がつて伸びをした。ニーナがのどをくすぐつてくれた。

「あんたは今日から、私の猫になるのよ」

「うん」と僕は答えた。

「名前はなんていうの？」

「ゾン」

この日から僕は、ニーナの部屋と一緒に暮らすようになった。翌日、二人でピクニックに出かけた。門を抜けて、丘の小道を歩いていった。天気の良い明るい日で、黄色い花が咲いている野

原をやわらかい風が吹いている。はじめのうちは張り切つて、並んで足元を歩いていたが、くたびれてきたので、途中からは肩掛けカバンの中に入れてもらつて、頭だけを出して景色を眺めていた。空のすみには何かが見えたのは、そのときのことだつた。

「あれは何かしら？」ニーナが言った。

「何つて？」僕は、ニーナが指さしている方向を見た。

光をきらきらと跳ね返す金色の巨大なものが、ものすごい勢いで近寄つてくるのだ。そしてあつと気がついたときには、二人ともそいつにかかえ上げられ、空の上にあった。地面を離れ、丘の小道がどんどん遠ざかつていく。台風のように強い風が吹きつけてくる。みるみるうちに王宮の上を通り過ぎ、高度をどんどん上げていった。僕はニーナにしがみついた。

「これは何なの？」ニーナが叫んだ。

僕は頭をめぐらせた。きらきら光る金属製のウロコで覆われているが、人工の機械ではない。あのウロコは、金ではなくただの真鍮だ。色はよく似ているが、高級な金属ではない。

「真鍮ドラゴンだ」僕はつぶやいた。

「なんですつて？」ニーナが引きつった声を出した。「どうして私は離れることができなの？ 身体が張り付いてしまつて、身動きもできないわ」

「あそこを見てごらん。こいつの身体にいろんなものがくっついて見えるのが見える？ ヤカン、

髪飾り、鍋にスプーンと何でもありだよ。でもみんな真鍮製品だ」

「だから、どうだつていうの？」

「真鍮ドラゴンは真鍮製品が寄せ集まってできたドラゴンなんだ。そういう生き物なんだよ。話には聞いてたけど、本当にいたんだ」

「それが私とどう関係があるの？」

「ニーナのベルトのバックルが真鍮製なんだよ。だからくつついちゃったんだ。ベルトを外せない？」

「だめよ」ニーナは手を伸ばして、試しているようだった。「外せないわ」

「いま外したら、地面に落ちちゃうよ」

ニーナはあわててバックルから手を離れた。真鍮ドラゴンの腹に吸いつけられたまま、僕たちは空の上を運ばれていった。高度は何百メートルあるのか、下を向いても白い雲以外は何も見えなかった。

「私たち、どうなるの？」ニーナが心細そうに言った。何とか励ましてやりたかったが、何も思いつかなかった。攻撃者が現れたのは、そのときのことだった。

最初に聞こえてきたのは、エンジンの音だった。あわてて見回すと、飛行機が一機、背後に迫っていることに気がついた。プロペラのあるずいぶん古めかしい型だったが、機体の頭のところ

にモリのようなものがついているのが目についた。ヤリをうんと大きくしたようなもので、大砲のような形をした発射装置に差し込んである。

真鍮ドラゴンは不安になっているようだった。翼の動きを早め、速度を上げ始めた。だがいくら古い型でも、飛行機に勝てるはずはなかった。エンジンの音を響かせながら、やすやすと追いついてくる。真後ろにびつたりとつけ、狙いを定めている様子だ。ニーナは叫び声を上げ、両手を振り回して合図を送ろうとしたが、真鍮ドラゴンの腹が邪魔になって見えならしい。飛行機がさらに近づいたので、パイロットの顔が見えるようになった。白いヒゲを生やした老人だった。真剣な顔で真鍮ドラゴンをにらんでいる。バスンと大きな音がして、煙とともにモリが飛び出してきた。そのモリが、長いワイヤーを後ろに引っ張っているのが見える。しなやかで細いが、強そうな金属のワイヤーだ。

真鍮ドラゴンは疲れ始めていた。さつとよける力など残ってはいなかったのだろう。モリは、その背中にまともに突き刺さった。穴が開き、金属が破れる嫌な音がした。真鍮ドラゴンが悲鳴を上げた。それでも翼を動かし、飛び続けようとする。

飛行機が舵を切り、進路を変えたことに気がついた。おなかを見せて右へ曲がり、遠ざかっていくようにするのだ。そうしながら長いワイヤーを繰り出して、機体の後ろに引きずっている。そのワイヤーは、もちろんモリにつながっている。

「何をしようとしているのかしら？」ニーナの声が聞こえた。

「他に飛行機は見えない？」

「飛行機じゃないけど、あそこに何かいるわ。大きなものよ。いつの間にこんなそばまで来たのかしら」

カバンから身を乗り出し、ニーナが指さす方向を見ると、確かにそのとおりだった。ソーセージのように細長い飛行船がいて、エンジンをフル回転させながら、近寄ってくるところだった。全長は二百メートルぐらいある。さっきの飛行機は、ワイヤーを引きずったまま、その飛行船へ向けて飛び続けていた。

と思つたら、ワイヤーが飛行機のおしりのあたりで突然ぶつんと切れ、落下していくのが見えた。だがその真下には飛行船がいて、鉄でできた長い腕を伸ばして、ワイヤーの先端をうまくつかまえた。

「うまいもんだね」

「感心してちゃだめよ」ニーナが怒った声を出した。

鉄の腕はワイヤーの端を、ぽつかりとあいた機械の口の中に差し込んだ。その機械はワイヤーをうまくかみこみ、すぐに巻き込み始めた。

「あれは何をしているの？」

「真鍮ドラゴンを捕まえるんだよ」僕は答えた。さっきの飛行機はもう着陸態勢に入っていて、飛行船の腹にカゴのようにつり下げられた滑走路へ降りていくところだった。ごく短い滑走路だが、途中に網が張つてあり、飛行機をうまくつかまえて停止させた。パイロットはすぐに飛び降り、滑走路を駆け出し、どこかへ見えなくなった。

ワイヤーが巻き取られていくにつれて、真鍮ドラゴンは飛行船に近づいていくしかなかった。真鍮ドラゴンは全力を出しているのだが、ワイヤーは強く、逃げることはできない。二分もたたないうちに、真鍮ドラゴンは飛行船の内部に引きずり込まれてしまっていた。広い部屋のようなところで、そこへむりやり引っ張り込まれてしまったわけだった。もう真鍮ドラゴンは死にかけていて、ぐったりと動かなかった。僕とニーナはその腹の下で身動きもできないまま、縮こまっているしかなかった。だが、突然ニーナの声が聞こえた。

「外れた！」

ニーナの身体が、バタンと後ろ向きに倒れた。とつさにカバンから飛び出したからよかったが、もう少しで下敷きにされるところだった。

「ここはどこなの？」ニーナが言った。

僕も見回した。床も壁も天井も銀色の金属でできている。だが答えようと口を開く前に背後から足音が聞こえてきたので、二人とも飛び上がった。